

国学者井上喜文の『紫式部日記傍註』書入れと「紫式部日記抜書」についての一考察

村田 駿

はじめに

井上喜文は、文政11年（1828）に、埼玉県入間郡石井村（現坂戸市）に生まれた国学者である。また「仲太郎」「蔭麿」「亮喜」の名で、和歌を詠む歌人でもあり、入間県第五区一小戸長などにも任命され地方政治にもかかわり、明治27年（1894）7月30日に没した。

その父井上淑蔭は、幕末から明治初期にかけて活躍し多くの著述をなした国学者・歌人である。明治には、新政府から大学中助教に任じられて東京でも活躍し、林信海などの近隣の国学者とも盛んに交流していた。父淑蔭の業績は、現在でも先行研究や展示などで取り上げられている⁽¹⁾。しかし、息子喜文についてはあまり取り上げられることがない。ただ、喜文も国学、特に古文辞学や考証学者として多くの著作を成しており、当時の国学や井上家文書を考えるうえで重要である。

喜文の著作は、『仮字摘解』『雅語集説』『農暇隨筆』『錦文訳語』『国史集説』⁽²⁾などがあり、言語、語法、歴史関係の物が多い。また、『徒然草』や『方丈記』『土佐日記』などの古典籍の注釈書も著している。

1 井上家文書の『紫式部日記』関連資料について

井上家文書に残された『紫式部日記』関連資料は、次の通りである。

【資料1】井上家文書に残された『紫式部日記』関連資料

井上家文書91

井上家文書202 「紫式部日記抜書き」 ※「抜書」

井上家文書2862・2863

『紫式部日記傍註(上・下)』 ※文政版『傍註』

井上家文書2864・2865

『紫式部日記傍註(上・下)』 ※無刊記『傍註』

まずは、この4つの文書を概説しつつ、これらの文書が淑蔭に関連するものか、それとも喜文に関連するものかを確認したい。

井上家文書91は、複数の異なる内容が混在した文書である。前半は「時鳥」「露吹結ぶ」「聲もすがら」「露吹きむすぶ」「聲もすがら」の項目について解説している部分が5丁分あり、「ラン ナリシ いかならむ ドノヤウニアラウ いかならじ ドノヤウニアツタ」のように単語をあげて、口語訳や活用等を分析している部分が8丁分ある。その後、

何らかの本文に傍註を付したものが裏表逆に綴じられている1丁を挟み、『紫式部日記』の本文に傍註を附している後半部分が47丁分ある。

冒頭の「時鳥」についての記述では「父淑蔭曰文選に」と書き出されており、この文書の書き手が息子喜文だとわかる。したがって、後半部の『紫式部日記』の本文と傍註についても喜文の手に成る可能性が高い。井上家文書202は、目録では「紫式部日記抜書き」と表題をつけている(以下「抜書」と記述する)。

1丁目の頁数の右上には、「文学全書ノウチ」と小書きされている。

『紫式部日記』が集録されて「文学全書」と略称されうる出版物を調べ

ると、野口竹次郎編『日本文学全書 第1編 竹取物語 伊勢物語 紫式部日記 徒然草』博文館 明治25年(1892)⁽⁴⁾ (以下『全書』)という資料に行き当たる。後に詳述するが、書かれている内容や項目上の番号と『全書』のページ数とが一致し、この書を指すと考えられる。

この『全書』の出版年から、当文書は明治25年(1892)以降の文書だとわかる。すると、淑蔭の没年が明治19年(1886)であるため、当文書は、息子の喜文のものとわかる。

井上家文書2862以降の4冊は『紫式部日記傍註』⁽⁵⁾という『紫式部日記』の注釈書である。組み合わせ関係が認められ、2セツトある。本稿では、井上家文書2862・2863を文政版『傍註』、2864・2865を無刊記『傍註』と区別する。『紫式部日記傍註』そのものを指す場合は『傍註』と表記する。

文政版『傍註』には、下巻の奥付に「文政四年辛巳十一月補刻 大阪心斎橋通北久太良町北二入 書林河内屋儀助」とあり、文政4年(1821)以降に刷られている。

無刊記版は、上巻の見返しに「書肆 青山堂藏」とあり、下巻奥付に「東都書林 京橋傳馬町一丁目 近江屋吉川半七 小石川傳馬院前鴈金屋青山清吉 本郷春木町三丁目 同支店」とある。「吉川半七」は、「吉川弘文館」の創業者である。この吉川半七が「南伝馬町」に店舗を開くのが明治3年(1870)であり、また「弘文館」の商号を使い始めたのが明治33年(1900)なので、無刊記版の出版・販売は明治3年(1870)から明治33年(1900)の間ということになる⁽⁶⁾。

淑蔭は文政3年(1820)江戸に出て、清水浜臣に入門し、その翌年に契沖の『百人一首余材』を読み国学を志している。同年に、文政版が

補刻されているため、すぐに入手した可能性もありえる。淑蔭の没年は、明治19年（1886）であるため無刊記版についても明治の初めに出たとすれば淑蔭が手に入る事も可能だ。もちろん喜文はそれを譲りうけることや、その在庫を後年求める事が可能である。どちらの版の出版時期も、井上淑蔭の活動時期とも、井上喜文の活動時期とも重なるためどちらが入手したのかは不明である。

ただし、文政版には壺井義知が付した傍註の他に、注釈や引用や関連場面を示した書入れがある。そして、4丁裏に「書入 全ト記セルハ文学全書本ナリ 明治廿七年一月校ス」と明治27年（1894）に「文学全書」なる本と対校した旨の書入れがあるのだ。こちらも後に詳述するが、その内容から前述の『全書』と考えられる。

淑蔭の没年は、明治19年（1886）であるため、この『全書』との対校を行ったのは喜文ということになる。一代にわたって使用された可能性もあるが、ひとまず喜文関連の資料と考えたい。

このように資料を概観した時、『紫式部日記』関連の文書は、喜文の活動時期に製作されたものが多いことがわかる。このため、この資料群を対象として喜文の活動の一面に迫ることにする。

特に、「抜書」と、文政版『傍註』とは、『全書』の書入れがあり、喜文関連の資料であることが明らかである。この共通点をもつ、二つの資料を詳しく見ていくことにする。

2 江戸期から明治期の『紫式部日記』研究と井上家の動向

ようによ受容・研究されていたのかを確認したい。井上家に遺された『傍註』出版前後の事情を確認する。

『紫式部日記』は、平安時代に紫式部によつて書かれた、中宮彰子周辺の日記と消息文らしき内容を持つ記述からなる日記文学である。

中世では『源氏物語』の注釈書『河海抄』などに『紫式部日記』の記述がたびたび引用されるが『紫式部日記』の注釈書は残っていない。

近世も『源氏物語』の注釈は盛んで、特に五代將軍綱吉の頃には、元禄文化が花開き『源氏物語』研究が隆盛した。了眞『首書源氏物語』延宝元年（1673）や、北村季吟『源氏物語湖月抄』延宝3年（1675）、

北村湖春『源氏物語忍草』元禄元年（1694）などが出版されている。この流行により、当然その作者と考えられる紫式部その人への関心も高まり、元禄16年（1703）に国学者安藤為章が『源氏物語』の評論的注釈書『紫家七論』を出版するに至った。この『紫家七論』は『紫式部日記』を参考し、作家の事情を読み込み、解釈を大きく進展させた。

『紫家七論』によつて『紫式部日記』そのものも注目されるようになり、有職故実家の壺井義知が『紫式部日記傍註』享保14年（1729）を著した。これが『紫式部日記』の最初の注釈書といわれている⁽¹⁾。

これ以降は、足立稻直『紫式部日記解』文政2年（1819）著（未刊行）、清水宣昭『紫式部日記釈』天保5年（1834）と続き、同書は明治23年（1890）『紫式部日記註釈』として再刊、与謝野晶子『新訳紫式部日記』大正5年（1916）、関根正直『紫式部日記精解』大正13年（1924）と続く⁽²⁾。

このように『紫家七論』の元禄16年（1703）以降、『紫式部日記』が新しい研究対象として注目され、その後定期的に『紫式部日記』関係

資料を確認する前に、喜文が活動した時期には『紫式部日記』はどの

の注釈書が著されている。

そのさなかの文政3年(1820)に淑蔭は江戸に出て国学を学んでいる。この時手に入れた可能性はある。その場合、古典研究の新しい波に触れたということになろう。

ただ、前述のとおり文政版『傍註』には、淑蔭没後の明治23年(1890)発行の『全書』を、明治27年(1894)2月にこれと対校する旨の書入れがあるため、主に喜文が用いたものと考えられる。

明治27年(1894)頃の『紫式部日記』関連の代表的な出版物は、清水宣昭『紫式部日記註釈』が明治23年(1890)に再刊してから、与謝野晶子『新訳紫式部日記』大正5年(1916)まで少し間が空く。特に、清水宣昭の『紫式部日記註釈』は「江戸期に衆目に触れた初の本格的な注釈書と言つて良い」⁽⁹⁾と評され、再刊されたばかりの頃である。また、『傍註』も享保14年刊本のほか、寛政年間(1789-1800)、文政2年(1819)、4年(1821)、嘉永7年(1854)補刻ものなどが知られており、前述のとおり無刊記版には明治の版もあるので、こちらも長く使用された注釈である。

つまり、喜文が対校を行っていた明治27年は有力な注釈書が長い間親しまれており、研究は停滞し、新しい注釈書が出にくい時期だったのではないかと思われる。

3 井上家文書202[紫式部日記抜き書き]について

それでは「抜書」を確認する。目録では「紫式部日記抜き書き」となっている。しかし、内容をみると【資料2】に示したとおり、特定の項目

ごとの箇条書きになつており、とても『紫式部日記』の一部をそのまま写し取つたものとはおもわれない。

一丁目1行目の「文学全書」は、前述したように野口竹次郎編『日本文学全書 第1編 竹取物語 伊勢物語 紫式部日記 徒然草』博文館明治25年(1892)の『全書』のことと思われる。【資料3】の『全書』1ページ目と比べてみていただきたい。

【資料2】「抜書」一丁目

紫式部日記 文学全書ノウチ

一 土御門殿ハ中宮彰子の御父道長大臣の家なり

不斷の御読経ハ中宮の御姫身のほとなれバ平産を祈らるゝ為

なり

さりけなくハ然有氣なくて惱しき氣色なきさまなり

二 おとろ／＼しくハ仰山などいふほとの義なり

対とハ寝殿、即正殿の東西にある屋なり

ゆゑ／＼しきハしさいらしきなり

さいさ 一本に御禅とあり

三 殿の三位君ハ頼通なり

心にくきハ奥床しきことなり

おほかるみへ云云古今秋をみなへし多かるのへに君かをはあ

やなくあたの名を

やたてなん 小野良材

四 暮のまけわざとは暮に打まけたる人より物を出して人ニを饗応することなり

【資料3】『全書』1ページ 頭注

土御門殿は中宮彰子の御父道長大臣の家なり

不斷の御読経は中宮の御姫身のほとなれば平産を祈らるゝ為なり
さりげなくは然有氣なくて惱しき氣色なきさまなり

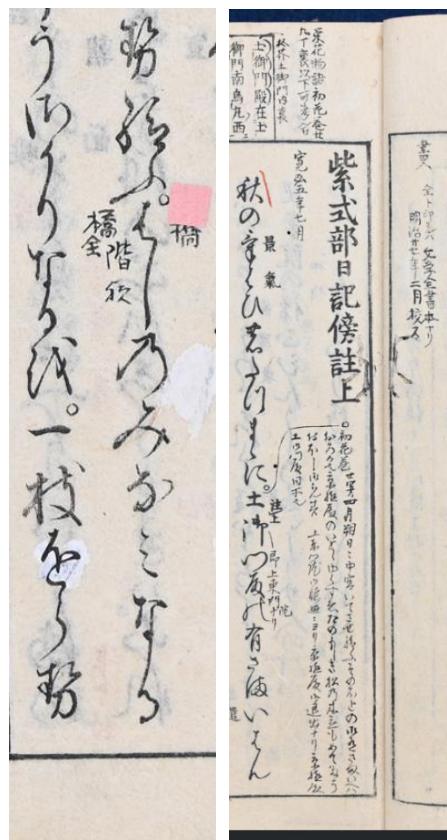
まず、【資料2】の「一」には「土御門殿ハ」「不斷の御読経ハ」「さりげなくハ」の三項目がある。これは、【資料3】にあげた、『全書』1ページの項目と一致している。この一致は2ページ以降も同様である。項目の記述内容も一致していることが、お分かりいただけるだろう。ただし、表記面では若干の違いがある。例えば、冒頭の「土御門殿」についての項目では、『全書』の頭注が「土御門殿は」としており、「抜書」は、「土御門殿ハ」としている。また、次の項目でも、「不斷の御読経ハ」と、項目の書き出しの助詞「ハ」をカタカナ書きにしている。

これは、本来頭注であったものを、本文から切り離して書き抜きした際に分かりにくくなつた項目ごとの区切りを表記上で解消しようとした工夫だと思われる。この他、若干の表記のゆれはあるが、一貫して内容としては『全書』の頭注からの抜き書きである。

なお、『全書』には、本文に傍記でフリガナや、難読語を示すと思われる傍線や、積極的に漢字を当てて意味を確定させる工夫⁽¹⁰⁾があるが、その点は「抜書」では、反映されていない。

つまり、頭注のみを抜き書きしたものである。

したがつて、この資料は『紫式部日記』の「抜き書き」ではなく、『全書』の「頭注の抜き書き」という性質のものである。



【資料4】文政版『傍註』本文冒頭・「全」書入れ

次に文政版『傍註』の書入れについて検討する。『全書』との、対校は全文ではなく、喜文が選び取つた箇所のみである。そこには、喜文の問題意識や興味関心、注釈態度が読み取れるのではないか。

なお、他の注釈書や本文も対校しており、『全書』とは違う記号が見受けられる。こちらについて今回はすべて調べることができなかつた。

また、喜文は書入れをすることで本文を校訂している。その本文校訂の良し悪しは問わない。今回は『全書』との関係を探りつつ、その書入れの傾向を探つていきたい。

『全書』の書入れは「全」という記号で記されている(【資料5】)。その書入れは37か所ある(【資料5】)。

4 井上家文書文政版『紫式部日記傍註』の
『(日本文学全書)紫式部日記』書入れについて

【資料5】文政版『傍註』「全」記号のつく書入れと『全書』対照表

本文[丁数] (「傍註」本文を変更)	書込	全書[頁数]	他書込 ※備考
1 はしのみなみ[上巻2丁表]	橋全 階歟	橋の南[2p]	
2 たるにとのゝうち。殿ノ三位の君[2丁表]	五字ナシ全	たるに、殿ノ三位の君[3p]	不審 ※5字はとのゝうちをさす。
3 三種房。[3丁裏]	経全	経房、[4p]	
4 なまめかし[4丁表]	ま全	なまめかし[5p]	よノ誤力
5 ようなさに[4丁裏]	全同	ようなさに[5p]	や益
6 たのみうみ[6丁表]	々全 々全	頬み・懐みゝ、[7p]	々扶々 々扶
7 ゆづらん[6丁表]	譲全	譲らん[7p]	非く扶
8 加持まいる[6丁裏]	り全	加持まより[7p]	り扶
9 紿ふて[6丁裏]	う全	紿うて、[8p]	ひ凡
10 おほられ[7丁表]	ほ全	謫(おほゝ)れ[11p]	ほ扶
11 みずほう[7丁表]	う全 非	御(み)修(す)法(ほう)[11p]	
12 橋の三位つる子[10丁表]	ナシ全	橋の三位[12p]	※つる子の部分を囲う
13 うめつ[10丁裏]	い全	うめつ[13p]	ぐ扶
14 あまれはわろ[10丁裏]	わ全	あまればわろ[13p]	い扶
15 さいし[10丁裏]	釵子全	釵子(さいし)[13p]	
16 大納言ノ君源邊子[10丁裏]	ナシ全	大納言ノ君、[13p]	※邊子の部分を囲う
17 いたき奉り[10丁裏]	まつり全	いたきまつり[13p]	
18 源少将雅道など[11丁表]	ナシ全	源少将など[13p]	※雅道を囲う
19 よむなるへし[11丁表]	へしのしあきの誤なるへし全	へしのしあきの誤なるへし[14p]	※上白由に書き込み 全書も頭注
20 あふみのかみたかまさは[13丁表]	ナシ全	近江守は[15p]	※たかまさを囲う
21 蔵人少将道雅を[17丁表]	ナシ全	藏人ノ少将を[20p]	※道雅を囲う
22 かいねり[21丁表]	皆練全	皆(かい)練(ねり)[26p]	
23 たまへりたり[24丁裏]	け全	始まへりたり[29p]	
24 はしけてそひ奉らせ給[25丁裏]	ひ全	始まへてそひ奉らせ給[31p]	い扶
25 殿ノうへ[26丁表]	殿のうへ全	殿のうへ[31p]	倫子 ※ノに朱で線がいれてある
26 中のまよりて[26丁表]	問全	中の間よりて[31p]	戸か上文
27 たちあかし[28丁表]	炬(たちあ)火(かし)全	炬(たちあ)火(かし)[33-34p]	き扶
28 いとほら[29丁裏]	しく全全	いとほら[35p]	しく扶
29 こゝち[30丁裏]	全同	子(こ)持(もち)[37p]	も扶 児持之上東ノ丁也
30 やらて[31丁表]	り全	やらて[37p]	り扶
31 まして[31丁表]	し全	まして[37p]	い扶
32 雪ふかなん[31丁表]	ら 扶全同	雪降らなん[38p]	ら 扶全同
33 かたう(勤)當[32丁表]	勘當全	勤當[39p]	難ナルヘシ
34 なりけり[32丁表裏]	る全	なりけり[39p]	る扶 勾
35 心々にそ[33丁裏]	全全	心々にそ[41p]	て扶
36 ほそとの(筋)[34丁表]	細殿全	細殿[41p]	
37 かきかはしける[下巻17丁裏]	此ノ誤トス全	かきかはしける[65p]	※全書頭注 かきかはしけるはけの誤なるべし

大きく分類して、『全書』の情報を併記するだけの書入れと、白塗り修正や喜文自身の書入れによつて『全書』に同意する書入れ、対して『全書』に否定的な書入れの三分類が可能である。併記の例は、次のようなものである。

1は、「傍註」本文が「はしのみなみ」と平仮名書きの部分である。それに対して、「橋全」と『全書』本文では漢字が当てられていることを書入れしている。それに対して、さらに喜文の意見として「階歟」と疑問の形をとりつつも『全書』を否定している。文政版『傍註』では、『傍註』の本文自体を白色で塗りつぶして、改訂している箇所が多くみられ、この改訂済の表記こそが喜文の意見かと思われる。そのため、この1のケースは『全書』の意見も併記しつつ、本文までは変えていない例と考えられる。このように単に併記する例もみられる。しかも、「階歟」と疑問まで添えている。

本文を決めかねて、併記する例はほかに、3、27、37に見られる。

次に、同意の例を紹介していきたい。

2は、「傍註」本文が「とのゝうち。」という箇所について、井上喜文の意見として「不審」として、『全書』には「五字ナシ全」と、本文の不在を書入れている。また、「と」の上に朱で「。」が打つてあり、「とのゝうち」という五文字をより分かりやすく示している。

この例も本文は白塗り修正していない。しかし、明確に「不審」と書入れをしており、『全書』の「五字ナシ」という指摘に同意しようかと いう例である。

5は、「傍註」本文が「ようなさに」という箇所に対して「全同」と『全書』も同じ本文を持っていると注記している。ただ、こちらでは「扶」の記号で書かれた別書には「ようなきに」とあると注記している。「ようなきに」に白塗り修正をしていないので、『全書』に同意していると考えられる。別の案があるが、『全書』に同意する例である。

9は、「給ふて」という「傍註」本文を「給うて」と白塗り修正して

いる。書入れは「ひ 凡」と「う 全」とあり、『全書』に同意して白塗り修正していることがわかる。

7は、『傍註』本文に「ゆつらん」と表記されている。この箇所の「つ」に対して「ぐ 扶」と書入れがあり、「扶」という記号を持つ書入れが「ゆくらん」の可能性を示唆している。ただ、その横には喜文により「非」と書入れがされている。また一方で「譲 全」と『全書』の「譲らん」を書き込んでいる。この箇所では、本文に漢字こそ当てていらないものの「ゆつらん」という『全書』に同意した本文のままにしている。3、14、31、33、35が同意の例だと考えられる。

最後に、否定の例を見ていただきたい。

8は『傍註』本文に「まいる」の「い」については白墨で消して「ゐ」となおり、「る」の左右に「り扶」「り全」と書き込んでいる。この箇所は『全書』も「扶」も参考併記にとどめ採用していない。

26は、『傍註』本文に「中のまによりて」とあり、『全書』からの書入れは「間 全」とあり、『傍註』と同じである。しかし、喜文はここに「戸カ上文」と書入れてある。ここは、白塗りして本文を書き換えるわけではないが、『傍註』にも『全書』にも否定的な書入れをしている。このような『全書』の例を受け入れない否定の例は、3、4、8、1、17、19、23、24、25、26、28、29、30、32、34、36がある。

他に例外として、12、16、18、20、21、は特殊例である。人名の注記として『傍註』本文に小書きされている記述については、その箇所を括弧で示して「ナシ全」と『全書』にない事を示している。白

塗りはしていないものの、小書きの例であるので特殊例として分ける。

個別の場面については、更に考察を要するが、同様に注記されている「扶」や「凡」などの資料が判明していないため、今回は控えたい。

このように、書入れを受け入れているかどうかを確認したところ、特別に一つの注釈書の書入れを優先するような傾向はみられなかった。

他には、下巻への注記が極端に少ないことが特徴としてあげられる。これは、『紫式部日記』の内容が、歴史記事的な内容からいわゆる消息文体と呼ばれる内容に変化している影響かとも考えられる。一方で喜文の手に成る『紫式部日記』の注釈書が見つかっていない。当年7月30に喜文は亡くなってしまったため途中のまになつたとも想像できる。⁽¹¹⁾

また、書入れされる語句の特徴としては、語法や表記についての記述が多い。この傾向は、契沖から始まる国学の仮名遣いへの関心にも沿い、また喜文に「仮字摘解」「雅語集説」「錦文訳語」などの語法や辞書的な著作が多い事と一致している。

判明した書入れ態度を次に書き出す。

- ・『全書』や先行研究から取捨選択して書入れを行っている
- ・他の注釈を受け入れるだけでなく批判的に検討している
- ・選択された項目は語法や表記が多く、歴史や有職故実は少ない
- ・下巻への注記が少ない
- ・『全書』頭注からの注記が少ない

このような書入れ態度を、書入れが行われた前年に刊行された『考異冠註 土佐日記読本』の緒言と見比べてみたい。

【資料6】『考異冠註 土佐日記読本』緒言⁽¹²⁾

緒言

終わりに

此日記の文諸本大に同じくして、少しく異なる所既に先達の諸註にて一渉り解し難き遺憾もなきが如くなれど、猶いかにぞや覺ゆるところ無きにしもあらぬを考へ見ん、とてこの考異は思ひ起しつるなり。さて元文は定家卿奥書し給へるを刊行したる流布本に拠り、かたはら参考せる書目は抄本^{北村季、附註人見、考証豆流、校註加藤、}、^{岸本由、校註足創見川、}、^{藤足創見香、}、^{橋守、}、^{俚言解は添註俚言解佐々木、参考は参考}、^{弘恭}、^{鈴木、}拾葉は扶桑拾葉本、類従は群書類従本、妙寿院本は抄にあけたる校をとる、為家卿本は考証に引たるを其他なをあれどさのみはとらず。異同取捨したる故よしは其所々余りこと繁くならんを思ひて大方は省きて至要の所のみを頭かきせり。また書肆の乞ふままに、いささか語解をもくはへつ。

著者しるす

まず、「猶いかにぞや覺ゆるところ無きにしもあらぬを考へ見ん、とてこの考異は思ひ起しつるなり。」とあるように、先行研究を認めつつもしつかりと異議のあることが述べられ、執筆の動機となつていて。そして、以下書き並べられる先行注釈や諸本を「かたはら参考」にしつつも、その内容は、「異同取捨し」ており、「余りこと繁くならんを思ひて大方は省きて至要の所のみを頭かきせり」と説明している。

この傾向は文政版『傍註』で、『全書』や諸註を見て書入れを行つたことと近い態度であり、喜文の一貫した注釈態度が認められる。

各節を振り本論をまとめる。1では、埼玉県立文書館に寄託された井上家文書にある『紫式部日記』関連文書が喜文の時代と考えられるものが多く、特に文政版『傍註』と「抜書」とに『全書』からの引用があり、喜文に関連する資料であることを説明した。

2では、淑蔭、喜文それぞれの時代の『紫式部日記』の研究動向について説明した。そして、喜文が『全書』を文政版『傍註』に書入れた明治27年頃は、『紫式部日記』の研究には新しい解釈による注釈書が出ていた時期であったのではないかと推測した。

3では、「抜書」が『全書』頭注の抜き書きであることを確認した。4では、文政版『傍註』の『全書』書入れ部分を確認し、その傾向を検討した。また『考異冠註 土佐日記読本』の緒言と対照し、喜文が注釈に対して一貫した態度を持つていることを確認した。

最後に、文政版『傍註』と「抜書」の関係について考える。

文政版『傍註』は、『全書』頭注の書入れは2か所のみで、書入れのほとんどは『全書』本文からの語法や表記・表現の違いを指摘する書入れであった。一方で「抜書」は『全書』頭注部分のみを抜き書きしていた。つまり、『全書』の頭注と本文とが分割され「抜書」と文政版『傍註』とに反映されている。このように「抜書」と文政版『傍註』は2つで1つの資料であり。すると「抜書」の作成年代も、文政版『傍註』が校訂された明治27年(1894)2月の可能性が高いと考えられる。

この二つの文書が作成されたであろう頃、喜文は60台後半で、明治26年(1893)に『徒然草捷解』と『土佐日記読本』明治27年(1

894)には『方丈記捷解』と、古典籍の注釈書を次々と出版しており、研究者として仕上げの時期であつたと考えられる⁽¹³⁾。喜文作の『紫式部日記』注釈書は存在を確認できないが、文政版『傍注』の書き込みには喜文の最晩年の『紫式部日記』に対する検討が残されており、重要な資料だと考えられる。

註

- (1) 稲村坦元「井上淑蔭と林信海」『埼玉史談』11巻2昭和39年(1964)埼玉県立文書館『農村の知識人たち』・奥貫友山・井上淑蔭・林信海』平成元年(1989)6月
 - (2) 『仮字摘解』井上家文書2・96・163、『雅語集説』井上家文書107・103、『農暇隨筆』井上家文書250、『錦文訳語』井上家文書217、『国史集説』井上家文書108。
 - (3) 井上家文書 井上淑蔭、井上喜文についての記述は主に次の資料による。
 - 小野文雄ほか『埼玉人物小事典』埼玉人物小事典刊行会昭和38年(1963) 166頁
 - 大護八郎「井上淑蔭」埼玉県人物志 上巻 埼玉県文化会館昭和38年(1963)
 - (4) 稲村坦元「井上淑蔭と林信海」『埼玉史談』11巻2昭和39年(1964)渡邊刀水『埼玉図書館叢書5編』再版 埼玉名家著述目録
 - (5) 埼玉県立埼玉図書館 加藤三吾『埼玉県人物誌』歴史図書昭和46年(1971) 8頁(6) 岩城邦男「30 井上淑蔭」『坂戸市歴史散歩』坂戸市教育委員会昭和53年(1978)
 - (7) 埼玉近代史研究会『埼玉人物小百科』埼玉新聞社昭和58年(1983) 171頁
 - (8) 埼玉県立文書館『収蔵文書目録28集』明星院・奥貫友山・井上家文書目録』平成元年(1989) 251頁(9) 井上喜文『方丈記捷解』杉本七百丸 明治27年(1894)
 - (10) 井上喜文『徒然草捷解』杉本書店 明治26年(1893)
 - (11) 井上喜文『考異冠註』土佐日記読本』杉本七百丸 明治26年(1893)1丁
 - (12) 井上喜文『考異冠註』土佐日記読本』杉本七百丸 明治26年(1893)1丁
 - (13) 井上喜文『考異冠註』土佐日記読本』杉本七百丸 明治26年(1893)
- ※引用にあたって、旧字を新字に改め「」「」を補うなどした箇所がある。

埼玉県立文書館『農村の知識人たち』・奥貫友山・井上淑蔭・林信海』

平成元年(1989)6月

「農民の文化と教養 第一節 寺子屋」『坂戸市史 通史編2』坂戸市

平成3年(1991) 129頁

朝倉治彦『江戸文人辞典 国学者 漢学者 洋学者』東京堂出版

平成8年(1996)

『常設展 埼玉の人物 農村の国学者と歌人 井上淑蔭と林信海』歴史と民俗の博物館 平成30年(2018)

また、喜文の没年月日は、井上家文書301「臨高院舜徳詠翁居士〔悔受納帳〕」の表紙に「明治廿七年」とあり、見返しに「七月三十日 命日」とある。

(4) 野口竹次郎『日本文学全書 第1編 竹取物語 伊勢物語 紫式部日記 徒然草』吉川弘文館HP「沿革」(令和6年4月19日閲覧 <https://www.yoshikawa-k.co.jp/company/cc246.html>)

(5) 壱井義知『紫式部日記傍註』享保14年(1729)

(6) 皆川完一「よしかわこうぶんかん 吉川弘文館」(国史大辞典編集委員会『国史大辞典 第14巻』吉川弘文館 平成5年(1993) 390頁)

(7) 増淵勝一『紫式部日記傍註(国研影印文庫)』国研出版 平成4年(1992)

(8) 吉沢義則『未刊國文古註釋大系第十三巻』清文堂出版 昭和13年(1938)『紫式部日記古註大成(日本文学古註大成)』日本図書センター

(9) 福家俊幸『紫式部日記解』『紫式部日記釈』についての一考察—江戸期の『紫式部日記』研究—

(10) 『全書』凡例 『紫式部日記の新研究』表現の世界を考える』新典社 平成20年(2008)

(11) 『一』 凡旧本の誤謬は、つとめて善本をあつめて対校し、その善きものに従へり。語の解しがたきものが、聊頭注を加へてこれを説明し、名詞その他は、つとめて漢字を以てし、傍に訓をさしたり。これ皆読み易からしめんがためなり。』

(12) 『二』 凡旧本の誤謬は、つとめて善本をあつめて対校し、その善きものに従へり。語の解しがたきものが、聊頭注を加へてこれを説明し、名詞その他は、つとめて漢字を以てし、傍に訓をさしたり。これ皆読み易からしめんがためなり。』

(13) 『三』 なお、井上家文書4223には『訂正増補枕草子春曙抄』(青山堂書房 明治41年)があり、そちらにも書入れがあり、途中で終了している。